

# 活性期待も効率性に難

## 苦難と挑戦

県立大50年の歩み

②

県立長崎シーボルト大の初めての合格発表は県庁玄関前であった。受験番号を確認して喜ぶ受験生を、県職員は遠巻きに見つめた。中には涙を流す人もいた。1999年2月のことだった。

県職員は大学をつくる仕事について「門外漢」。当時設置された県新大学準備室にも大学勤務経験者は少なく、苦勞の連続だった。教授の確保や大

学施設の整備、各種ルー

ルづくりなど、毎日多忙を極めた。「この日のために頑張ってきたんだ」。当時、室長を務めた滝田泰博(68)は、これまでの苦勞が報われた気がしていた。

「二つ目の県立大」の構想が動き始めたのは、県立大の開学から約30年後だった。以前から要望があつた県立女子短大の四年制大昇格に加え、全

国で看護学科がで

## 二つ目の県立大



「新県立大」の開学式。1999年に開学した県立長崎シーボルト大は「県立大シーボルト校」となった。=2008年4月、西彼長与町

た時代の流れも後押しした。県立長崎シーボルト大は99年4月、西彼長与町に誕生した。

一つの県に二つの公立大ができることに財政面など懸念の声はあつた。しかし学部増設の声は根

強く、多くの若者を呼び込むことができる「地域活性化」という地元の願いに、大きな異論はなかった。

一方で国立大では行政のスリム化を図るため独立行政法人化の動きが進んでいた。「二つ目の県立大」の教育面や運営面での非効率な部分はずぐに表面化。2001年ごろから独立行政法人化の話が持ち上がる。法人が運営面を担うことで、大学は教育・研究に専念できると考えられた。

02年には有識者でつくる県立大あり方検討懇話会が「05年をめどに法人化」「08年をめどに統合、再編」の方針を示し、事態は大きく動き始める。

このころはもつと地元が大学を、大学が地元をそれぞれ活用し合いながら互いに発展してほしい。そう期待を込めた。

〓文中敬称略〓  
(後藤洋平)

新大学ができて間もない法人化に、戸惑いの声も少なくなかった。さらにネックになったのは、二つの大学の距離と校名だった。法人本部の場所をめぐって「綱引き」もあつたが、本部は佐世保に置くことが決定。校名は「長崎県立大」、シーボルト大は「県立大シーボルト校」として08年4月に開学した。

県公立大学法人の元理事長で、シーボルト大ができた当時、副知事を務めていた清浦義廣(81)は「人口減少に歯止めがかからず、(二つ目の)大学をつくっておいでよ」といった個人的には思

つたことには思